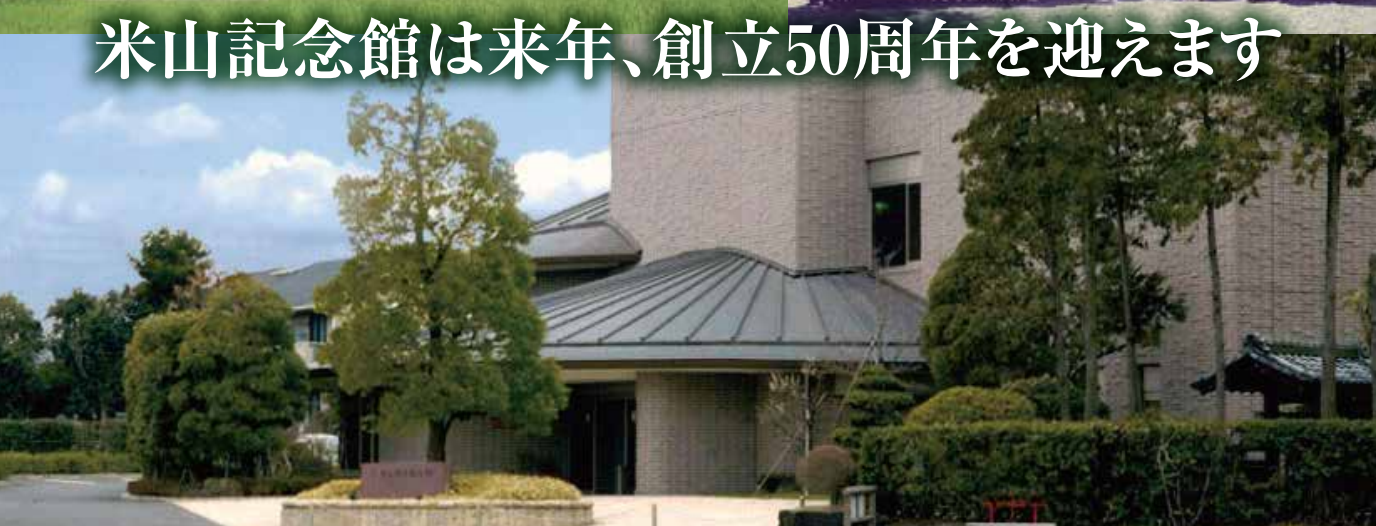




米山記念館は来年、創立50周年を迎えます



(写真上左)旧米山梅吉記念館 (写真上右)旧館での「米山梅吉翁生誕110年記念式典」(昭和53年2月4日)
(写真下)現在の米山梅吉記念館

多くのロータリアンの想いが凝縮され
米山記念館というカタチになった。
時代が変わっても米山梅吉に寄せる思いは変わらない。

旧米山梅吉記念館の上棟は、米山梅吉の23回目の命日である昭和44年4月28日に行われた。そして8月の終わりに建設が完成して、昭和44年9月16日午後2時から竣工なった記念館の開館式が執り行われた。当時の理事長である松井謙一は「わがロータリークラブの祖とも申すべき米山梅吉大人生誕されて百年、まことに意義のあるこの年ここに多くの賓客とゆかりの深いロータリアンの皆様方をおむかえして、この祝賀の一日を催すことが出来たことはひとしお感銘深く覚えるものでございます」と挨拶された。神奈川県や名古屋3クラブからも多数が出席して総勢77名と地区内クラブや館役員など約100名で竣工を祝った。

現在の記念館は平成9年7月16日に地鎮祭が行こなわれ、待望の落成式は平成10年4月28日、米山梅吉の命日で記念館春季例祭として行われた。招待者、参加者は約300名で屋上まで人が溢れて、白雪の富士山も晴天に聳え、記念館屋上から見える大きな風景を楽しんだ。理事長の坂本豊美は「さる平成6年創立25周年を迎え記念式典を行いました、その後見学者が次第に増加してまいりました。そしてもっと広い集会の場所が欲しいという声を聞きまして記念館の老朽化と共にその対応を迫られたのであります」と述べ、また記念館前の道路拡幅計画により土地の一部提供を余儀なくされることにもお話が及んでいます。そして「僭越なる言葉が許されるならば米山記念館を日本ロータリーのメッカとしてその品位に相応しい内容の記念館に発展させて行きたい」と述べています。

(「記念館の歴史—黎明の頃から旧記念館建設とその運営—」を本文掲載しています)

春季例祭 報告



積 惟貞理事長挨拶



講演者 銀の鈴社 柴崎由紀氏



米山梅吉氏生誕150周年お祝い
一般財団法人三井報恩会
理事長 槍田松瑩様よりのお花



米山家関係者もご参加の会場風景



アトラクションの
パントマイム

- 日時 平成30年4月21日(土) 午後2時
場所 米山梅吉記念館
- 開会前墓参
 - 講演(2時30分～)
 - [講師] 銀の鈴社 柴崎 由紀 氏
 - [演題] 『米山梅吉 その時代と人々』
～伝記刊行のための取材報告～
 - アトラクション
パントマイム 山田とうし 氏
 - 懇親会

ロビーにて、全国からご参加の130人余の方々と柴崎講師やパントマイム山田氏を囲んで懇親会。米山翁を偲びながら情報交換の楽しい一日でした。

米山梅吉 その時代と人々 ～伝記刊行のための取材報告～

講師 銀の鈴社 柴崎 由紀 氏

いま進行中の米山梅吉伝記刊行のための調査の中からお話をさせていただきます。私自身もアメリカ留学経験があり、帰国後金融機関に務めたこと、夫がロータリークラブに所属していた、また米山より6歳年上新渡戸稲造の本を執筆したことも今回このプロジェクトに関わる大きなご縁でした。新渡戸と米山は同時代の人で、二人とも武士の家に生まれ養子に出た、アメリカに私費で留学している、その後名を残したという点、さらに二人ともスピーチの達人で、文筆家でもありました。二人とも奉仕の精神をお持ちで、社会のために多くのことをされました。色々な意味でご縁を感じ担当させていただくことになりました。米山の渡米の時の資料を、外務省外交史料館で別の調査をしていたときに見つけました。サンフランシスコの総領事館にあった記録で、外務省に戻ってきた記録です。

米山の資料にはアメリカではいくつかの大学で学んだという記載がありますが、各大学に問い合わせましたところ、これまでに履修の記録はどこからも出てきていません。

米山がサンフランシスコに行った時、福音会にお世話になります。これがメソジスト教会の最初の教会で、現在のパイン教会です。米山が第五班のメンバーとして名前があがっていることが確認できました。



パイン教会は1886年に創設された全米最古の日本人メソジスト教会で、前身はハリス牧師がいたサンフランシスコ福音会です。ハリス牧師は、記念館二階展示室に写真がありますが、ここの初代牧師です。サンフランシスコの日本人街にブキャナンYMCAという日本人基督教青年会館がありました。米山は1928年に当時のお金で1000円を寄贈しています。1935年に落成、建築費の半分は寄附で賄ったということになっていますので、米山の寄附したお金もこの建築費として使われた可能性があります。

サンフランシスコといえばケーブルカーですが、米山は、アメリカ人にかかわれたり、ケーブルカーに合図をしても不親切な車掌さんは止めてくれないので、思いきって飛びつき振り落とされて怪我をした、などと書いています。

新渡戸稲造、内村鑑三等札幌農学校の人たちの多くが洗礼をうけたハリス牧師に、米山もお世話になっています。米山が留学後に『提督彼理』という本を出版しますが、初版本の冒頭に、フローラ夫人の英訳した「黒船」という題の詩が載っています。米山自身この本をMCハリスご夫妻に捧げる、と冒頭に書いています。ここからもこの二人が恩人であったということがよくわかります。

横須賀市久里浜のペリー公園に記念碑があります。米山が『提督彼理』を書いた5年後、米友協会（今の日米協会の前身）が建てた記念碑です。米友協会はアメリカに在住経験のある人が集まって作った親睦の会で、米山は米友協会の発起人の一人です。その後米山は日米協会のメンバーにもなっています。久里浜はペリーが来たときにアメリカからの国書を受け渡した場所で、この碑の右後方にペリー記念館もあります。



同じ横須賀に、「万代会館」があります。大磯から横須賀までの一帯は吉田茂など政財界の方が別荘を持ったところで、その建物が今壊されつつあり、それを引き止めようと神奈川県が主導で、有志の市民たちが「湘南邸園文化祭」という活動をおこない、建築物の価値を知ってもらおうとしています。



「万代会館」もその一つで、茅葺きの家です。万代順四郎は青山学院の後輩で、米山は万代のことを「せがれ」とか「うちの孝行息子」と呼ぶなどかわいがっていました。万代は苦学生で、卒業後三井銀行にはいります。その後も米山の家で書生のように住み込んで、こどもたちの面倒をみます。万代のお見合いから結婚まで米山夫妻が面倒をみました。万代は米山のことをこんなふうに書いています。「自分の一生のうちで、最も大きな影響を自分に与えてくれた人は、一族では母と兄であり、社会に出てからは三井の池田（成彬）、米山（梅吉）両先輩であり、学院時代は本多院長先生であった。米山さんという人は、自分の立場で人の役に立つことならなんでもしようと常に用意していた。アメリカで学び、帰国してついには人を指導する立場になった自らの境遇にいつ

も感謝している人でした」。

万代さんはこの後三井銀行会長なども歴任して、当時のベンチャー企業「ソニー」の設立時に協力した方です。子どもがいっしょらなかったのがご夫人亡き後、この建物は横須賀市に寄贈されました。

米山の実家和田家の直ぐ上のお兄さん菊松さん、歌人でもあり和田秋郎という名もあります。その二男和田実さんは、米山の長女愛子さんと年が近く仲がよかったということです。実さんのお孫さんにあたる橋本眞理子さんにも伺いました。そこで拝見したのが米山が甥っ子実さんに結婚祝いに贈ったドイツ製の時計です。



谷中には和田家のお墓がありますが、継承する方がいないということで永代供養するとのことでした。

1923年9月1日、関東大震災当時米山はどこにいたかご存知ですか。軽井沢です。「万平ホテル」のすぐ左に総檜の日本家屋があり、この夏ここで孫たちとすごしていたそうです。朝吹さんが「軽井沢に別荘でももったらどうですか」と誘い、その下見もかねた滞在だったそうです。お昼ごろの地震だったので、みんなでお箸を手にしたそのときガタガタと揺れて夜には停電にもなったようです。暴動を起こした者が碓井峠を越えてやってくるという根拠のない噂もひろがり、孫たちも怖がったので、米山はこの玄關にステッキを持って立っていたという記録も残っています。この建物は元々東京の三井財閥十一連家の一つ鳥居坂家のものの一部を移築したもので、それが桧館としてここにあり、戦前外国人だけでなく裕福な日本人にも利用されていました。戦後はマッカーサー

司令部が占領して、将校達のホテルとして利用されていました。今はたん熊という日本の和食のレストランです。結局米山はこの日本家屋のすぐ裏手に別荘をお求めになったそうです。現在名倉さんというお宅がその辺りで、軽井沢らしい別荘です。

関東大震災の復興院総裁に後藤新平が就任され、米山も参与になっています。後藤さんの幼なじみが齋藤実です。齋藤氏はロータリーとのご縁も深く、岩手県水沢の家が記念館になっています。奥様が米山の奥様と同じ春子さんです。敷地の中の建物に所蔵品が展示され、春子夫人が晩年を過ごされた部屋もあります。この所蔵品の目玉がロータリーマークのついた着物の帯です。この帯をしめて夫人が家族会に出席していたということです。齋藤は東京RCの名誉会員でもあり、1933に年次大会が開かれ齋藤氏が首相官邸に総勢669名の大茶会をもよおし、その映像もこちらで拝見しました。齋藤はRCが大好きだったようで、予告もなしに例会にいらしたそうです。「ロータリーの精神が立派なのはいうまでもないが、僕がロータリーを好きなのは例会の進行と規律です。わずか1時間の短時間であれだけの能率をあげる会は他にはあるまい」とおっしゃっています。

米山は息子3人のうち2人が20代で亡くなっています。横浜の総持寺にお墓を求めました。それがなぜか、疑問でした。明治40年、米山は、大病して修善寺温泉「新井旅館」で療養生活をしています。新井旅館には米山さんが昭和13年に泊った時の写真が残っていました。新井旅館は木造の建物がそのままほとんど変わっていません。その時に近くの修禅寺に通っていました。ここで丘宗潭老師に出逢います。療養中お寺に通って彼と話しをしているうちに、禅というものを学んだということです。



米山自身は、禅について、次のように書いています。

〈禅は、宇宙の大精神を心に思い浮かべて静かに観察し、小さなことにこだわらず、人生や世界についての奥深い道理を人間の日常生活で発揮することが本来の姿である。「常識」、または、「修養を積んで心身を立派にし、とくによいものだけを選び取れる常識の極意」ということでもあるのではないだろうか〉。

1937年青山学院初等部(当初は緑岡小学校)設立、校長になります。初等部は渋谷の街中から近いですが、静かな環境のよいところですよ。3年生になると、青山学院の歴史を学ぶということで、授業を参観させていただきました。昨年12月には創立80周年の記念式典も行なわれました。



2月には公益財団法人ロータリー米山記念奨学会設立50周年記念式典がありました。1952年東京RCがはじめた当初は年間59人の学生さんを援助し今は年間800人、事業費は年間およそ13億円(2016年度決算)です。歴史的世界的にも類をみない日本のロータリー独自の活動で全国のロータリアンたちの協力によるものです。米山は奨学会ができる前になりましたが、その志を引き継いでいるのがこの奨学会で、世界で活躍する平和の架け橋となる人材育成をしているということです。

駆け足になりましたが断片的に米山の足跡をお伝えしてきました。伝記刊行にあたっての苦労話ということでしたが、今回のプロジェクトを通して色々な方に出会ったり、色々な場所に行っています。苦労というより楽しく学ばせていただいております。

米山梅吉の著作を じかに読むシリーズ

その1

「新隠居論」(大正3年著)

この作品は、米山梅吉が三井銀行の常務取締役となって5年後、「社会への報恩の趣旨」を述べた文章です。更に6年後の大正9年にはわが国最初の東京ロータリークラブを創立し初代会長に就任します。

米山梅吉は沼津中学時代に雑誌を作って回覧したばかりでなく、東京の文芸誌「^{えいせい}穎才新誌」にも数多く投稿を行いました。

後年の述懐に「夏目金之助というのと僕のが一番よくでたよ。それで名を覚えていたが、これがその後の漱石だった。」とあります。

私たちは今、漱石全集をルビ付きで読んでいます。

同時代の米山梅吉の原典に触れようとすると、現代人にはルビのある方が便利ではないかと考え試みて見ました。今号を皮切りに順次掲載を予定いたします。

しん いん きょ ろん 新隠居論 ^{よねやま うめきち} 米山梅吉 ^{ちよ} 著

^よ 余は ^{ひと} 独り ^{じつぎょうかい} 実業界と ^い 謂わず ^{しゃかい} 社会 ^{かくほうめん} 各方面の ^{ろうじん} 老人
^{かぶ} 株 ^む に向かつて、^{いんきよ} 隠居 ^{かんこく} することを ^{かんこく} 勧告 ^{かんこく} したのであ
^{いんきよ} る。隠居 ^{いんきよ} の由来 ^{いんきよ} は、今更 ^{いんきよ} 余 ^{いんきよ} の説明 ^{いんきよ} するまでもない
^{おも} が、思う ^{ちゆうこ} に中古 ^あ に在 ^{いんきよ} っては ^{しゅうきょうじょう} 隠居 ^き は宗教 ^き 上 ^き から来
^{にんげん} たもので、人間 ^{みょうり} 名利 ^{ちまた} の巷 ^{だつきやく} から脱却 ^{ほうもん} して法門 ^き に帰
^え 依 ^い ずるとい ^い う、所謂 ^い 遁世 ^い 的 ^い の意味 ^い を有 ^い して居 ^い った
^{そうい} に相違 ^い ない。

^{くだ} 降 ^{せんごく} って戦 ^{じだい} 国時代 ^{こうさん} には降参 ^{しゃさい} 謝罪 ^い の意味 ^い に於 ^い り
^{いんきよ} て隠居 ^{いんきよ} とい ^{おこな} うことが行 ^{きんせい} われ、近世 ^{いた} に至 ^{まつた} っては全 ^{まつた} く
^{ひと} その人 ^い 一個 ^い の平和 ^い 安楽 ^い の為 ^い めに行 ^い われて居 ^い た
^{ゆえ} ようである。故 ^そ に其 ^{こうな} の功 ^な 成 ^と り名 ^み 遂 ^{しりぞ} げて身 ^み 退 ^{しりぞ} くもの
^{もちろん} 勿 ^{しか} 論 ^い 、然 ^い らざる ^い も苟 ^{その} も其 ^し 嗣 ^{いえ} の家 ^つ を継 ^た がしむる ^た に足
^{あんしん} り安心 ^{きょうち} の境地 ^あ に在 ^{かなら} るものは必 ^{いんきよ} ず隠居 ^{よう} した、要 ^{よう} する

^{とし} に年 ^{いんきよ} をとれば ^{むかし} 隠居 ^{しきた} するとい ^{しきた} うのが昔 ^{しきた} からの仕 ^{しきた} 来
^{しきた} たりである。

^{しか} 然 ^{あらた} るに新 ^{につぼん} なる日本 ^{こう} は、幸 ^ふ か不幸 ^ふ か世界 ^せ の文明 ^{かい}
^{かくこく} 各国 ^{きょうそう} と猛烈 ^な なる競争 ^な を為 ^{じだい} なければならぬ時代 ^{じだい} に
^{ゆえ} はい ^{ろうじん} った。故 ^い に老人 ^い と雖 ^い も隠居 ^い して居 ^い る場合 ^い では
^い ないとい ^い うて皆 ^い な大 ^い いに社会 ^い の各 ^い 方面 ^い に活動 ^い す
^{よう} る様 ^ら になり、これ ^い 等 ^い の人 ^い 達の ^い そう云 ^い う気 ^い 組 ^い に依 ^い つ
^{につぼん} て、日本 ^{ぶんめい} の文明 ^{しんぼ} は進 ^{こくうん} 歩 ^は し国 ^は 運 ^は は発 ^は 展 ^は した ^は に相 ^は 違 ^は ない
^{しか} のである。伴 ^さ し更 ^さ に一 ^い 歩 ^い を進 ^い めて維 ^い 新 ^い の初 ^い と
^{その} なる其 ^{ひと} 当時 ^{かんけい} の人 ^{かんが} との関 ^み 係 ^み を考 ^み えて見 ^み たい。

^{につぼん} 日本 ^{おうべい} が欧 ^{せつしよく} 米 ^{しゃかい} と接 ^{そしき} 触 ^{がぜん} して社会 ^い の組 ^い 織 ^い が俄 ^い 然 ^い 一 ^い 変 ^い
^い したと云 ^い うのは実 ^い に未 ^い 曽 ^い 有 ^い の事 ^い であ ^い っ、此 ^い の天 ^い
^か 下 ^け 稀 ^う 有 ^{げんしやう} の現 ^{もと} 象 ^{こんにち} の下 ^{ろうじん} に今 ^{とうじ} 日 ^{せいねん} の老 ^{せいねん} 人 ^{せいねん} 当 ^{せいねん} 時 ^{せいねん} の青 ^{せいねん} 年 ^{せいねん} は、

そもそ い か きかい で あ あ よ さく
 抑も如何なる機会に出逢ったので有るか、余は昨
 しゅうはつこう じつぎょう の にほん そうかん この きかい
 秋発行されたる「実業之日本」増刊「此機会」にも
 の お ごと およ よ なか きかい
 述べて置いた如く、凡そ世の中には機会というも
 みとお おも だいいち か せんざいいちぐう
 のが三通りあると思う、その第一は彼の千載一遇
 こう きかい いわゆるふうん さいかい いろいろ じんぶつ
 の好機会で、所謂風雲に際会した色々な人物が
 あらわ き こうぎょう た れきしじょう いちじ き かく
 現れて来て功業を建てる、歴史上に一時期を画
 だいかくめい だいせんそう い とき
 するような大革命とか大戦争とか云うような秋で
 だいに ひと いっせいいちだい こうふこう ぶん
 ある。第二にはその人の一世一代の幸不幸の分
 きてん しょうがい いつ きつ で あ
 岐点ともなるべき生涯に何時か屹と出逢うことの
 たいせつ きかい だいさん にちじょうしんべん むら
 ある大切な機会である。第三は日常身辺に群がっ
 く ところ せんしゅばんよう しょうきかい
 て来る所の千種万様の小機会である。

いわゆる れきしじょう いちじ き かく きかい
 所詮歴史上に一時期を画するような機会とは
 めいじ いしん それ こ い きかい そうぐう
 明治維新が其である。斯う云う機会に遭遇した
 ひとたち しょうしょうへいぼん いやしく いちげいいちのう せい
 人達は、少々平凡でも苟も一芸一能があれば成
 こう い まま ま ばつくん し たい
 功は意の儘であった、況して拔群の士にして大
 し いた むろん こと たん ないらんでき かく
 志を抱けるものは無論の事で、単に内乱的の革
 めい い ばか ぶんめい うなが じせい けきへん
 命と云う許りでなく文明に促された時勢の激変で
 しん ちしき も せいねん こと せんちよう
 あったから、新知識を持った青年は殊に尊重され
 ま とく い わけ めった るいれい み せい
 又た得意であった訳で、滅多に類例を見ない成
 こう し で き ひかくてきなが えい
 功を占めることが出来た、そうして比較的長く栄
 よ い じ で き
 誉を維持することが出来た。

しか いしん じだい さ こ せんざいいちぐう こうき
 併し維新の時代は去り、此の千載一遇の好機
 たら ひとたち そ いくねん おく で き
 を捕えた人達と其れより幾年か後れて出て来た
 また ほ ねんばい おな そ しゅっしんち
 もの、又は略ぼ年輩を同じくするも其の出身地を
 こと お ひとびと あいだ おお こうきよ
 異にして居った人々との間には大いなる溝渠が
 うん ふうん さ あま いちじる ずいぶんしつ い ひと
 でき、運不運の差が余りに著しく随分失意の人の
 ふへいだん じつざい い か じつりよく
 不平談もあったので、實際、如何に実力があって
 み すうねんまえ ひとたち こうみようふうき て つば
 見ても、もう数年前の人達が功名富貴手に唾し
 と い ふう さようむさうさ い
 て取ると謂った風に左様無造作には行かない、
 ここ おい あるもの まえ せいこうしゃ こうえい はい あるもの
 茲に於て或者は前の成功者の後影を拝し、或者

はんこう
 はそれに反抗
 い ほか
 して行くの外は
 なかった。

しか めいじ
 然るに明治
 すで よんじゅうご
 も既に四十五
 ねん よ たいしやう
 年、世は大正に
 い はや さん
 入りて早くも三
 せいそう えつ い
 星霜を悦し、維
 しん へんかく どうじ
 新変革の当時
 ゆび お かぞ

より指折り数う



米山梅吉(40歳頃)長男東一郎と共に

しじゅうゆうしねん けい か お な どう
 れば四十有七年を経過して居るが、尚おその当
 じ せいこうしゃ さんそん いま ろうこ め
 時の成功者が残存して今に牢乎として抜くべか
 せいりよく とど お いしん どうじ あ けんない
 らざる勢力を留めて居る。維新の当時或る圈内
 は い ひと ふうん すで い とお
 に這入っていなかった人の不運は已に言った通
 しか さら これら ひとびと じゅうねんにじゅうとき へだ
 り、而して更に是等の人人により十年廿年時を隔
 うま ひと じんじやういちよう せんしん こと せい
 てて生れた人は、尋常一様のことで先進如き成
 こう で き はず せいぞんきやうそう げきじん しゃ
 功の出来る筈がなく、生存競争の激甚となった社
 かい た いっしょうけんめい はたら おのおの うんめい かい
 会に立ちて一生懸命に働き、各々その運命の開
 たく つとめ ほね お なみ
 拓に力めるのであるが、その骨の折れることは並
 たいてい うた ひと ねんしよ わず そうい
 大抵ではなく、転た人をして、年所の僅かの相違

じせい いかん こうふこう か おお
 でも時勢の如何によって幸不幸が斯くまで大いな
 さ しょう たんそく にな
 る差を生ずるものかと嘆息せしむるのである、人
 げんしやかい もと つね こうへい な しか い
 間社会は固より常に公平のものでは無い、併し維
 しん こうぎやう その じだい めぐりあ ひと うえ な
 新の功業が其時代に廻合せた人の上に投げ
 えいかん いかん とくべつ じじよう で い
 た栄冠は、如何にしても特別の事情に出たと謂

わねばなるまい。

ゆえ も どうじ せいこう ひと ちよくせつ
 それ故若しその当時の成功した人、また直接
 くんぎやう あずか らせんしんげんろう ひと いんえん
 勲業に興らずとも、それ等先進元老の人の資縁(註)
 ひご ばつ い で き かん
 庇護よりして闊と云うようなものが出来て、その関
 けい よ せいりよく ゆう いた ひとたち お
 係に依って勢力を有するに至った人達が老いて

いつ さんりつ い い ねんしよ
何時までも存立して居ると云うことになる、年所
その た てん おい こうれつ あ ひとたち いつ まで こころざし
其他の点に於て後列に在る人達は何時迄も志を
の きかい え は い それだけ
伸ばす機会を得ずに果てるであろう、否な其丈
とど も ろうじん そうしや あつとう い
に止まらず、若し老人が壯者を壓倒して居るとな
じぎょう うえ へいがい はなは
ると事業の上にも弊害が甚だしくなる。

よ さら ここ いちろん およ ひと そのしよくむ
余は更に此処に一論がある。凡そ人は其職務

たい てきとう もちぶん な はず
に対して適當の持分が無くてはならぬ筈である

につぽん しゃかい ほどこのもちぶん すく また そのはん い
が日本の社会程此持分が少なく又は其範囲の
ふめいりよう ところ こ ひと おお しごと
不明瞭な所はあるまい、之れは人が多くて仕事
すく い げんいん く じつ

の少ないと云う原因からも来るであろうが、実
ろうじんかぶ ど こまで かんきよう なにごと かんしやう ちかごろ
老人株が何処迄も頑強で何事にも干渉し、近頃

りゆうこうご い とかく ひりつけん こと おこな
の流行語で云えば兎角非立憲の事が行われる

かくほうめん ものごと きそくただ しんぽ み
ので、各方面に物事の規則正しい進歩を見るこ

こんなん むえき こと
とが困難となるのである、無益の事であるからと

い ただ はいし で き ひつよう よう
云って直ちに廃止も出来ず、必要なばとて容

い じっこう はんたん こんきよ りくつ もと
易に実行もできず、判断の根拠を理屈に求めず

ろうじんかぶ きげん ま え ばあい おお
して老人株の機嫌に待たざるを得ない場合が多

およ しごと こんなん そのりきりよう いかん
くある、凡そ仕事をする困難は其力量の如何より

ま ろうじんかぶ どうい え い
も、先づ老人株の同意を得て行かなくてはならぬ

い あ こ ふう かくこ じ
と云うことに在る、斯んな風であるから、各個が自

ぶん しょくむじよう も ぶん まも よ い わけ
分の職務上の持ち分さえ守れば宜いと云う訳に

い したが せきん かんねん とほ かつそ
は行かぬ、従って責任の観念が乏しくなる、且夫

ひと けいけん い もつと とうと
れ人には経験と云うものは最も貴ぶべきものであ

かわ じゆうぶん ひと はたら たいせつ
るのにも拘らず、充分に人を働かさぬため大切な

けいけん つ わりあい すく またこれ つ じゆうぶん
経験を積むことも割合に少く、亦之を積むも充分

りよう じつえき で き じじよう かくの
に利用実益することの出来ない事情にある、如

とき じつぎようかい と とく だい せんがい じらい
此は実業界に取りては特に大なる損害を持来す

い あ
るものと謂うべきで有る。

むかし ろくじゆう ぐんたい めん ななじゆう ち し
昔は六十にして軍隊を免じ七十にして致仕す

じょうらいのべきた しだい とく につぽん げん
とあった、上来述べ来た次第により特に日本の現

ざい じようきよう おい ろうじんたち はや いんきよ りゆう
在の状況に於ては老人達の早く隠居すべき理由

しょうしやうはや さよう おも
がある、少々早めに左様しなければならぬと思う、

しか あと ひと こま いんきよ かなら あんいつ
然らざれば後の人が困る、隠居は必ずしも安逸

むさぼ とうよう ろうしゆう い あら せいよう
を貪る東洋の陋習とのみ謂うべきに非ず、西洋に

おこな た いんきよ しかた こと
も行われることで、唯だ隠居の仕方を異にするば

かりである。

わがくに お いんきよ ぜんぜんよ なか かく
我国に於ける隠居は全然世の中から蔵れて

しま い み したが みれん のこ だんこう な
了うことを意味する、従って未練も残り断行が為

せいよう いんきよ いんきよ とも
しにくくなるが、西洋の隠居は隠居すると共に

よ なか ぼつこうしやう いんきよ いんきよ
世の中と没交渉になるのではなくて、隠居は隠居

ぜん な いくた しごと すなわ いま
然として為すべき幾多の仕事がある、即ち今まで

しょくむ いそが お で き にんげん つくす
職務に忙しく追われて出来なかった人間として尽

ところ ぎむ つ にんげん じぶん か
べき所の義務を尽くすのである、人間は自分の稼

ぎよういがいしょくしやういがい なに しゃかいこうしゆう ため ほうし
業以外職掌以外に何か社会公衆の為に奉仕す

ところ な にんげん ぎむ じゆうぶん
る所が無くては、まだ人間としての義務を充分に

はた せいようじん いんきよこ な し
果したとはいえない、西洋人の隠居後に為す仕

ごと この い み しゃかい ため つく
事は此意味から社会の為に尽すというのである、

これ にんげんほうおん ため い また か
之を人間報恩の為と云う亦可なりである。

しか せいようじん いんきよ のち い こと
然らば西洋人は隠居して後どう云う事をして

お い せいじじよう いんきよこ たの
居るかと云うに、政治上のことも隠居後の楽しみ

ひと
の一つである

が、それは暫

べつ
らく別としても

いんきよしや な
隠居者の為す

しょくぶん すく
べき職分が少

じぶん
なくない、自分

じじよう はや
の事業を早く

そうしや ゆず
壯者に譲つ

て、市町村自

ちだんたい せわ
治団体の世話



大正初期、外遊大西洋客船上において
一服する米山梅吉

また がっこうびょういん た こうきょう こと つと ひと おお
又は学校病院その他公共の事に努める人が多
いのみならず、そう云うことをするのが紳士の理
想と云っても宜い程の事である、英国に於いては
じつぎょうか そのせいこう つげ はじ せいかい はい れい
実業家が其成功を告て始めて政界に入る例が
多い、最近死んだチェンバレン氏の如きもその大
なるものの一人たるを失わぬ、但し政界に入る人
は比較的老境に入る以前に於てするようである。
政治は一種特別であるとしても、前に謂った通
り其他に隠居して為すべき公共の事業は沢山に
ある。そこで余の我邦の元老達は勿論凡そ成功
せる老人株の人達に望むのは、隠居してこう云う
ことをして貰いたいからである、此の意味から先
輩の適當の時期に於ては隠居することを切に勧
める、其人達が隠居をしてそう云う方面の世話を
しないから日本の公共的の事業は兎角旨く行か
ないのである、発起されたる趣意の如何に善美
にして然かも実績の挙がらざる実例が随所に多
い、日本の公益事業と云うものは之に依りて以て
衣食に従事するものが遣り、功成り名遂げた老
人達が与らないのは遺憾である。

例せば我邦最大の慈善博愛を標榜する某団
体の如き、上は皇室より下は全国民を網羅して其
の会員と為し、至高至清厳然として犯すべから
ざるものであるに拘らず、何か其裏に不始末が
あったものと見え、曾て悪徳新聞に恐嚇されて金
を出したとか云うことがあった、これ等も何処か欠
陥があったからで悲しむべきことである、況して其
以下のものに至っては本当に監督し世話をする
有力な人がなく、善美なる名目の下に集められた
金は放任されて無意味に費やされ勝ちの場合が

多い、我国に於ける各種の公益事業が如何に不
適當の人に依って首唱され且つ経営せられつつ
あるか、少しくその間の消息を知るものは何人と
雖も痛嘆措かない所であらう。

茲に於て余は特に我が実業界の元老に向
かつて、其名誉と信用とに加わるに貴重なる経験
を以てして、大いに公益事業の世話を焼いて貰
いたいのである、看來れば日本の社会は改革を
要することが真にたくさんある、第一に日常生活
上の公德と云うものが頓と重んぜられず乱暴狼
藉のことが至る処に多い、社会の弊風を矯正す
ると云うようなことは、最も觀察注意の行届く筈の
所謂隠居株にして始めて之に当り得るのである、
即ち功名を遂げ富貴でそうして経験を持った老
人は日本の權威であり国宝でなくてはならない、
そうして其老後の務めが前に述べ来ったように
なることを望むのである。

(大正三年)

(註) 夤緣 … 賄賂によって出世の道をのぼすこと

注記: 原典は養島清夫氏が、平成8年10月に復刻した冊子に依りました。
旧字、送り仮名は原文のままとし、ルビの記入は藤井が行いましたので
修正の余地があります事をお断りいたします。

藤井 圭二(平成29年12月23日)

大正7年(梅吉50歳) 中国金融経済視察



左端 米山梅吉 前列右端 團琢磨氏



中央奥が米山梅吉

米山梅吉記念館

記念館の歴史

—黎明の頃から
旧記念館建設とその運営—

建設経緯①

第1章 黎明のころ

現在の公益財団法人米山梅吉記念館は、昭和44(1969)年3月26日、財団法人米山梅吉記念館として設立された。続いて、同年9月16日、記念館(旧館)の建設がなった。この誕生を促したのは、静岡県駿東郡長泉町下土狩にあった米山梅吉終焉の場所でもある米山別邸の宅地分譲の情報であった。米山が亡くなって20年を過ぎた昭和41年ころ、米山別邸が分譲に付されるようになった。このことがこれを伝え聞いた地元ロータリアンらを米山別邸保存運動へ、そして米山記念館建設へとかりたてていった。



当時の三島駅(現在の下土狩駅) [『人物寫真集 米山梅吉翁』より]

1 米山別邸の由来

米山は、幼少のころ過ごした長泉の地をこよなく愛し、郷里長泉に本邸とは別の拠点をおこうとした。明治42年12月、下土狩駅の近く、長泉町下土狩に3093坪の土地を取得した。さらに建物完成後の大正7年6月には、その南側の約550坪を取得している。

東京に活動の中心をおく米山にとって、郷里での拠点は、鉄道の駅に近い方がよかった筈である。東京新橋と神戸をつなぐ鉄道、東海道本線が全線開通したのは、明治22年7月のことである。この東海道本線は、昭和9年12月、丹那トンネルが開通するまで、現在の御殿場線を通っていた。すなわち、国府津から御殿場線を経て、沼津に至っていた。当初、佐野(現

米山梅吉記念館は、平成31(2019)年に創立から50年を迎えます。この50周年を記念し、今号から来年秋号まで3回にわたり記念館の歴史について記していきます。平成17年に記念館の創立35周年を記念し、米山梅吉記念館の元常務理事で弁護士の井口賢明氏(沼津北RC)の手により出版された『超我の人 米山梅吉の^{あしあと}聲音』の第3編 財団法人米山梅吉記念館の歴史より原稿を引用し、ご紹介させていただきます。尚、紙面の制約上一部抜粋・要約しております。

在の裾野)から沼津まで停車場がなく、明治31年6月になって、下土狩駅ができた。この停車場は、丹那トンネルが開通し、現在の三島駅が出来るまでは、その名称が三島駅であった。この長泉村唯一の停車場である三島駅は、その後長い間、同時に三島町まで敷設された豆相鉄道とあいまって、三島、伊豆方面の玄関口の役割を果たしていた。

この別邸の場所は、後に下土狩駅ということになる三島駅とは指呼の先である。一方、長泉町上土狩の米山本邸は、直線距離にして1500mほど北東で下土狩駅からは、歩けば30分ほどの道のりになる。米山にとって、幹線鉄道の駅のすぐ目の前は、うってつけであったに違いない。

米山は、大正6年、この地に別邸の建築をはじめた。木造2階建てで、1階42坪、2階20坪ほどのこじんまりしたものである。2階建てにしたのは、前にはより良く駿河湾を望め、後ろには富士山が良く眺められるからであろう。ここは、富士山噴

火のときの溶岩がいたるところ露出し、少し小高くなっていた。ここを訪れた歌人の佐々木信綱は、「君は駿東郡下土狩に邸あり。起伏おもしろき丘の上に、めずらしくも竜舌蘭の花咲きたり」とて、招かれて訪ひし事ありしが、」と述べている。佐々木信綱がここを訪れたのは、昭和6年7月のことである。



竜舌蘭

米山は、この別邸が気に入り、人に来訪をすすめていたし、病がちとなった晩年には、ここで過ごすことが多かった。そして、米山終焉の場所でもあった。

この土地は、米山死亡後、嗣子米山桂三が家督相続し、昭和26年5月、多くの部分が知り合いの会社に渡った。資産家である米山家の遺産の処理は、大変なことであつたらう。その後、一、二所有名義が変わり、昭和41年6月、不動産会社に移った。それまでの一時期、昭和31年に短い期間首相をつとめた石橋湛山が居住していたこともあった。



別邸入口

2. 米山別邸保存運動

そんなとき、この3千坪とも4千坪ともいわれる米山別邸が不動産会社により分譲に付されるという情報もたらされた。これにより長泉町周辺の地元、沼津、沼津北、三島、伊豆長岡（現伊豆中央）の近隣ロータリークラブの会員何人かが米山別邸保存の動きをした。なんとか、この由緒ある家屋敷を手に入れ、ロータリアンのため保存をしようというのである。

この地元の会員の中心となったのが鱸正太郎（静岡RC）である。鱸は、昭和40-41年度に第359地区（神奈川県・静岡県・山梨県）のガバナーをつとめた。そんな立場から保存運動の代表的な役割を果たすことになる。また、国際ロータリーのしきたりで、ロータリーのガバナーは、その任務の始まる前、アメリカで行われる国際協議会に出席する。その折り、ウォーリングフォードにあるロータリー創設者であるポール・ハリスの記念館を訪ねる。鱸の脳裏には、そんなことが浮かんでいた。日本のロータリーの創始者米山梅吉記念館をと。

こうして、米山別邸保存の動きが、鱸を中心として、地元ロータリークラブの間で表にでることになる。保存の対象となるのは、およそ340坪の土地と2階建60坪余の建物である。それにしても、これを入手するには、1千数百万円を必要とした。これには、相当、広範囲にわたり募金を呼びかけなければならなかった。

こうして「米山別邸保存会（仮称）」と銘打って、有志が別邸

の保存に乗り出し、昭和42年静岡県東部の11のロータリークラブに呼びかけた。同時に、当時の359地区内にもこのような動きを知らしめ、募金を呼びかけた。

この結果、およそ450万円の募金を得られ、または得られる見込みとなった。しかし、別邸を取得するには、資金的にも遠かった。また、時既に遅く、分譲は進んでしまっていた。そこで、方針を変え米山本邸の土地に目を移した。

米山本邸は、米山家先祖伝来のもので、米山家が所有し、昭和21年4月28日米山死亡後、家督相続により三男米山桂三の所有となっていた。およそ1千坪の広さで、米山が分骨されている米山家の墓地もすぐ近くであつた。当時ここには、長屋門が残っていた。

この敷地の一角を借り、別邸の建物を移築し、これを記念館にしようというのである。初め、瀬川篤（三島RC）が電話で米山桂三に頼んだが、とりあってももらえなかったという。米山桂三は、単に父米山梅吉のためのそのような形の記念館建設に、すぐには承諾しなかった。

米山桂三としては、「日本のロータリークラブを創立したのは父だけの功績ではない。他の有力者の協力の結果によるもので父のために計画してもらうのは本意ではない。」ということであつた。しかし、地元の方々の熱意に対して、一度現地に行き状況を見た上で、有志の方々の話をうかがうということになった。

このようなことから、あわただしい日程のなかで予定されたのが、沼津北RCでの米山桂三の卓話である。それが終わった後、地元の有志と懇談をすることとなった。

米山桂三は、結局、このような地元クラブの熱意を了解し、土地の一部を提供するとの意向を示した。ただ、別邸は殆ど腐朽して余命短く移築は無理であろう、せめて米山家代々の長屋門を記念に残してもらえれば嬉しいとのことであつた。その際、米山梅吉の遺品等について、火災で大部分消失したが、残っているものについては記念館へ提供するとのことでもあった。

その後、有志が会合して協議の結果、別邸を移築する計画を取り止め、この集まりを「米山記念館建設準備委員会」と改め、新たに鉄筋コンクリート製の記念館を建設し、出入口口には、本邸に残されている長屋門を原形のまま補修して使用する方針を決めた。

こうして別邸保存会を米山記念館建設準備委員会に改組することにした。ただ、目途のついている資金では、長屋門の

修理、敷地内の造園を考えると、記念館の建物は、約12坪と
なってしまう。そこで、もっと大きな建物にするため、募金目標を
1,600万円ということとし、広く全国規模で募ることとした。

3.財団法人「米山記念館」建設準備会の発足

昭和43年5月24日、財団法人「米山記念館」建設準備会
を発足させた。主な方針として、記念館の建設を全国的な規
模で呼びかけること、建設後の管理運営のために財団法人
を設立することを決めた。この時点までの募金は、静岡県東
部を中心に、静岡県全域のクラブ、それに第359地区内の神
奈川県内のクラブからのものが主で利息も合わせて544万
円余であった。

その後、ロータリーの友の編集事務所から米山梅吉翻訳の
『ロータリーの理想と友愛』の売上があったなどとして、100
万円の応募を得られた。また第360地区（愛知県・長野県）の
地区大会から、多額のものが贈られた。このような篤志を含
め、昭和43年7月末までに700万円余の募金を得られること
になった。これで、とりあえずは、最低限の建物建設の目途も
ついた。昭和43年10月29日、既に募金に応じてくれていた
クラブ、個人に中間報告をするとともに、今度は募金目標額
を2,000万円とし、全国のロータリークラブ、ガバナーに応募
のお願いをした。それらの結果、法人設立申請時の昭和44年
3月18日現在で1,536万円となった。募金は建物完成後も
続き、昭和45年6月30日には1,810万円となり、目標に対
し、9割の達成を得た。

このように、北は北海道、南は沖縄に至るまで、全国津々
浦々のロータリークラブ、個人から募金を得られた。沖縄県の
クラブからは当時の情勢から、ドルでの寄金であった。このほ
か、三井信託銀行、三井銀行本店、三井信託銀行のOB会や
東京クラブの呼びかけによって米山知友の方々などからも相
当額の寄附を得られた。

第2章 旧記念館の建設と その後の運営

機運が熟し、記念館建設の槌音が聞けるようになった。大
きくなくてもよい、小さなものでよい。豪華なものでなくてもよ
い、質素なものでよい。ただ、きらりと輝くものであれとの願い
である。埴生の宿でも、楽しい我が家である。そんな関係者の

思いがかなって、記念館の完成になる。しかし、その後の道の
りは決して平坦なものでありえようがない。幾多の難題があっ
た。そんな過程のなかで、旧館の建設と旧館時代の運営を振り
返ってみる。

1.財団法人の設立

建物である記念館の建設をハードの部分とすれば、その運
営、維持のソフト面の管理主体として、財団法人を設立する
こととした。これについての監督庁との折衝、具体的な作業
は発起人の一人小林完（沼津北RC）が担当した。昭和44年2
月21日に財団法人米山記念館設立発起人会が開かれ、設立
趣意書、寄附行為、役員、発起人代表者を決めた。理事長は
松井謙一（沼津北RC）、常務理事には宇野三郎（沼津RC）が
なり、事務所は沼津北RCの事務局のある桃中軒とし、事務所
は沼津北RCが担当した。このようにして、発起人代表を松井と
して、昭和44年3月18日設立許可の申請をし、3月26日の許
可となった。

2. 記念館の建設

資金的に記念館建設の目鼻がついた昭和43年の秋頃から
設計の準備に取りかかった。方針として2階建て延約50坪を目
途とし、昭和44年1月頃までに概略図ができた。法隆寺の夢殿
にも似た外観の六角形の建物である。設計を担当した瀬川篤
（三島RC）はこの以前に、奈良県高取町の米山の実父方和田
家の菩提寺、光明寺にその墓を訪ね、その折、法隆寺にも寄っ
ている。当初の案では屋根の勾配が急であり、あまりにもお寺
のようだとすることで手直しがされ、床面積1階25.24坪、2階
24坪の鉄筋コンクリート造り2階建てと管理棟（長屋門）
12.99坪、1階は玄関、ロビー、展示室、事務室。2階は小会議
室、大会議室と決まった。契約代金は750万4千円である。

地鎮祭が昭和44年3月2日に米山桂三、発起人らが出席し
挙行され、上棟式は米山23回目の命日である昭和44年4月
28日に行われた。

長屋門は、建築前、現在の新館敷地出入口部分にあったも
のが移築され、正面右側を管理人室、左側を書庫に改造した。
この書庫は、火災にも耐えられる相当に厚いコンクリート製の
ものである。この移築、改築費用にも146万2千円を要した。

また、内部の記念館家具類、カーテンなど83万3100円、
境界垣、造園に25万円、長屋門改築等合わせて、254万
5100円を要した。

3.開館とその後の運営

4月28日上棟式を行なった後、8月終わりには完成し、昭和44年9月16日竣工になった記念館の開館式が行われた。



旧館



展示室



会議室



事務室

記念館が完成し、法人も設立できた。しかし、解決しなければならない問題が幾多あった。初めは電話もなかった。電話が引かれたのは昭和45年秋になってからである。財政的に常時管理人を置くための余裕がない。隣に福昌寺があり、その住職に管理人をお願いした。事務局である沼津北RCに参観の申し出があると管理人に連絡をし、開けて案内をしてもらう。突然の来館者には手の施しようがなかった。ときには、沼津北RCの誰かがかけつけるとかであった。それでも、開館1年で、ロータリー関係者や一般の来館者が150名ほどであった。

また、場所のわかりにくさも問題であった。現在は伊豆縦貫道が開通し、記念館前の桜堤通りが整備されたので、東名高速・新東名高速からや三島駅からのアクセスが向上し、わかりやすい道となったが、当時は記念館周辺の道路は迷路のように入り組んでいて、間違えずにたどり着けることが奇跡的なほどであった。その為、細々ではあるが道案内を設けた。また、長泉RCが設立されてから、その骨折りで標識の数が増したが、本質的にはかわらず、又、周辺の道幅が狭い為、大型バスの乗り入れは困難を極め、駐車場が無いことも問題であった。

一番の難題は常置の管理人がいないことである。参観者の処遇もむろんであるが、常時開いていないことによる建物の傷みが大きく早いことである。これは、結局は財政基盤の強化の問題である、基本的には寄附に頼るしかない。このことが運営を不安定にさせる。理事長の松井は出ずるを制し、剰余があるとこれを三井信託銀行の貸付信託にまわした。その運用益で収入の安定を図ろうというのである。しかし、これとても、元が少ないのであるから、多くを期待できるわけではない。

記念館建設の為の浄財の願いは、昭和45年度でとりあえず終わった。その後は各ロータリークラブ、地区の周年行事や近隣クラブの炉辺会談の余剰などの寄附であった。昭和48年度になって第359地区から年間ロータリアン1人当たり200円の資金を得られることになった。これで年間約100万円強の安定的な資金の見込みが立った。第359地区は昭和49年度になり神奈川県第359地区(現在第2590地区と第2780地区)と静岡県・山梨県第362地区(現在第2620地区)に分かれたが神奈川県の第2590地区と第2780地区からは現在も続けられている。感謝すべきことである。又、地元の第2620地区では、現在までも多くの寄附を頂いている。このような資金の安定も得られ、平成5年からは常置の管理者として、元長泉町教育長の吉川邦夫、郷土史家の柏木勲を頼むことができた。

昭和44年3月3日、米山家より約150坪の土地の借用を受け記念館が建設されたが、ここにはほんの僅かの駐車場の設備しか無かった。このため、車で来館される方の不興をかっていて。理事長の松井は米山桂三に地続きの土地の借用を再三に渡りお願いし、その結果ようやく承諾を得られ、昭和52年2月24日394.05坪を借り受けることができ、普通車9台、大型バス1台分の駐車スペースを確保することが出来た。(以下、次号へ)

米山梅吉 エピソード

Vol.2

豊富な資料を駆使して読み解いた
貴重な二冊です。
書簡や著作物などの資料を多数収録。



米山梅吉伝

米山梅吉の出生から晩年まで、米山の同郷で青山学院の後輩でもある佐々木邦氏によってまとめられています。

さらに、三井銀行、青山学院、三井報恩会、ロータリークラブなどの関係者、生前の米山と親交があった人達の証言を交えて、様々な角度から光をあてて、米山の人となりをかき上げさせています。「梅吉を知るにはまずこの本から」の1冊です。和歌や俳句、漢詩など、趣味の人米山の文藻も掲載しています。

佐々木邦著 青山学院初等部刊

A5判／上製本 ケース付き
本文590ページ／4,000円

米山梅吉を追慕して青山学院初等部が発行者となり、昭和61年4月7日初版発行された『米山梅吉伝』は、総ページ620ページの大作です。この書の最初から135ページまでは佐々木邦氏による「創意と奉仕の一生」という米山梅吉の一代記で、米山と親しく交わった筆者の視点からエピソードも含めて詳しく米山の人物像が描かれています。それ以後は追憶集としてご家族、三井銀行関係、三井信託関係、青山学院関係、ロータリー関係、米山梅吉の文藻などに分けて、それぞれ氏と交流のあった方々が、ご自身と米山梅吉との関わりの中から思い出を語られています。

今後この館報で米山梅吉伝より抜粋させていただき、人格者教育者としての米山のエピソードをご覧いただきたいと思っています。

ロータリー 関係

藤原 楚水（三省堂顧問）

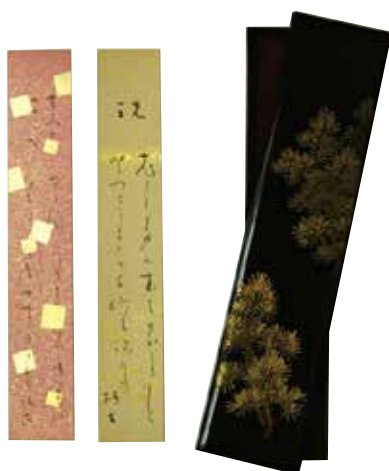
「米山さんの人物」より

米山氏とロータリー

米山さんは本職は銀行家であったが、一面、宗教家的でもあり、また詩人的な熱情をもった人でもあり、国家社会を憂い、これが教化善導に志があったところは多分にまた政治家的な素質も備えられておられた。米山さんは今日、わが国に盛んになったロータリー・クラブの輸入者で、自分がその中心となって、この運動を推しすすめられた人であり、このことはまた米山さんが平素抱かれていた理想に尤も近いものであったからであろう。即ち世の人々が自己の職域を通じて社会、国家に対して真の意味でサービスしたならば、世の中はもっとよい社会となり、政治も、実業もよりよいものとなるだろうといえることを常に考えておられた。

川西実三氏の話によると、かつて同氏は社会保険制度の立案をしたことがあったが、当時の蔵相賀屋氏はその調査費用について難色を示したので、三井報恩会に米山氏を訪ねて、案の内容や使命などについて説明すると、米山さんは静かにそれを聞いておられたが、では報恩会から政府から支出するものと同額だけ出しましょうといわれたさうである。これなどもその関心と視野の広さを物語るものといえよう。

新たに寄贈された資料



梅吉翁の書による短冊と歌稿
杉浦友子 氏寄贈



梅吉翁の書による掛け軸
木内康英 氏寄贈

思い出

川鍋 直子

土狩の家には昭和19～20年頃、梅吉翁のお見舞いに母と参りました。
戦後は、青山高樹町の愛子様のお宅へ伺い、大叔母 はるの無事な姿に接しておりました。
私が昭和28年秋に結婚した折には、直接お祝い金を頂き嬉しかったです。
私の父 豊も生前は月に一度必ず梅吉翁をお訪ねして、得意な琵琶の弾き語りなどをお聞かせしておりました。本人は窮屈でお勤めのような思いで通っていたようですが、大叔父にとっては五十を前にして亡くなった次兄 菊松の長男である甥っ子豊は、真面目で目立たない性格でしたので気になっていたのかもしれません。

お知らせ

米山梅吉生誕150周年 秋季例祭

多くの皆様のご来館をお待ち申し上げます。

〔日時〕平成30年9月15日(土)午後2時～ ●開会前募参

〔場所〕米山梅吉記念館ホール

●講演(2時30分～)

〔講師〕^{さくらい} 櫻井 ^{よしゆき} 祥行氏

「静岡県文化奨励賞」授賞
『伊豆碑文集』上梓
静岡県立韭山高等学校長



〔演題〕『伊豆と世界史』

～維新から150年、米騒動から100年～

●アトラクション

アンサンブルFEP (フェップ)

フルート、二胡、ピアノの演奏と歌で、人生を楽しもう!
クラシックから演歌、ジャズ、ミュージカル、
歌謡曲と幅広く、楽しい演奏と歌で、
眠くならない30分をお届けします!

●懇親会

登録料無料

ロビーにて講師、演奏者を囲んでの懇親会
多くの皆様のご参加をお待ちしております。

目で見る米山梅吉の全貌

米山梅吉の幼少から晩年までを網羅した写真集で、米山研究には欠かせない一冊です。

慶應に生まれ明治、大正・昭和を生き抜いた
日本の偉人

人物写真集 米山梅吉翁

(日本の実業・歌人・漢詩人・俳人・教育者・
政治家であり国際的人格者)

米山梅吉翁・目次

特別寄稿 米山梅吉年譜略

米山梅吉の家系

梅吉少年の映雪舎・沼津中学校での活躍

日本と世界の偉人との出会い

実業家への歩み 数多くの米山梅吉の著書

米山梅吉の貴重な愛読書

学校教育界へ重要な役割を果たす

教育者としての米山梅吉

国際的奉仕の理想を唱える

社会事業と文化事業の発展を援助

米山家先祖代々から所蔵されている古文書、名刀等

米山梅吉が役所へ提出した各種の書類

北に富士の霊峰を仰ぐ長泉村下土狩米山別邸

下土狩米山別邸で使用されていた愛用品・遺品の数数

米山家代々の由緒ある菩提寺 米山梅吉の遺品・愛用品

などの内容別に数多くの写真が収録されています。



執筆・編集者 米山 聰
写真撮影・編集者 大川孝昭
平成9年4月28日発行

B4判横長・特製布貼り装丁
題字他金箔押し仕上げ ケース付
総ページ460ページ 15,000円(消費税込)

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分

〔開館時間〕午前10時～午後4時

〔休館日〕●月曜日

●12月28日～1月4日

●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報

Vol.32 秋号

発行日／平成30年8月21日

発行者／公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 積 惟典

〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101

URL <http://yoneyama-umekichi.jp/> E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp